

いつでもだれでもチャレンジできる社会を！

多様性が尊重され「ダイバーシティ社会」の実現に取り組む企業やNPOが増えている。個人においても、かつてと比べれば多様な生き方が選択できるようになった。一方で、再スタートに挑戦しにくい、受容されにくい状態はいまだ変わらない。本特集では、再チャレンジ支援の現状を取材し、真に多様で寛容な社会の実現に向けて、企業や個人ができることについて考える。

お互い様、おすそ分けの心

—今日は、再び何かを志す人にエールを送っていたきたくてやってまいりました。日本は、何かとレッテルを貼られがちで再チャレンジしにくい社会です。なかでも、元受刑者にとっては、再スタートに一番大事な「仕事」に就くことが困難だという現状があります。

中井 日本は、かつては「お互い様、おすそ分け」の文化だったんですね。東北の震災で見直されたのは、絆という言葉以上に「お互い様、おすそ分けやんか」という心でした。昔、「村八分」という言葉が

◆巻頭インタビュー

元受刑者に心の羅針盤を授ける「職の親」

千房株式会社
代表取締役

中井 政嗣 氏

お好み焼をディナーに発展させた「千房」^{ちぼう}。丁稚奉公からたたき上げた代表取締役の中井政嗣社長は、「おかげさま」の心で、理想の企業のかたちをつくり上げてきた。お客様に明日への活力を届けることはもとより、社員の幸せを何より大切に

する。通底するのは、一人でも多くの人に夢と希望を持つてほしいとの思い。再スタートを期す元受刑者の雇用に早くから取り組み、他企業や財団とも連携して進める「職親」^{しよくしん}プロジェクトは、国の政策を動かすに至った。背景にある思いや、現場の実情について中井社長に聞いた。



あって、日頃は付きあわなくても二分Ⅱ火事と葬式だけは手伝いました。二分だつてきついですが、今は火事も葬式も知らんという世の中。私は「お互い様のおすそ分け」は日本の誇れる文化だと思います。すべてはおすそ分けなんです。

—本当にそうですね。柿は全部取らずに鳥にも残しておくという、本来日本人が持っている優しさを取り戻そうということでしょうか。

中井 経営者として思うのは、経済の語源「経世済民」も「経営」という言葉も、ただの一字もお金儲けや効率、合理性のことを書いていません。世を^{おとこ}経め民を^{すく}済う、お経を読むがごとく人様に喜んでいただく、人様のお役に立つということですね。

私は、新入社員研修で、「誰のため何のために勉強し、仕事をするのか」と聞くのですが、間違いなく「自分のため」と返ってきます。でも、その研修の間にも一所懸命働いて稼いでくれている人たちがいるから勉強できるわけで、その分知識を吸収して、それをいかす責任があるのだと話します。「自分のため」と考えるから「ほつといてくれ」となる。でも人は皆、誰かの世話になっていて、一人では生きていかれません。そして人に喜んでもらってはじめて、やりがいや生きがいが生れます。

—そういうお話をなざると、新入社員は変わってきますか？

中井 変わりますよ。「自分のた

め」は、決してやりがいにはつながらない、私たちはお客様に「さあ明日からがんばろう!」と喜んでもらえる非日常空間を提供するんだと。

—御社は中井社長のお考えや経営理念に共感して入社する方が多いのでしょうか。

中井 そういう人ばかりではないですが(笑)。入社式で私はとてもない話をします。「あなた方は本当にいい会社に入社しました。なぜなら私が社長だからです。私は皆さんを両手広げてお迎えします。これからいろんなことがあるでしょうが、決して皆さんを見捨てません。だから良い会社に入ったねと申し上げたんです。期待してましょ」と。いい会社に入社したと本人が安心して言うことができれば、家族や友人も励ましてくれて、がんばろうという気になります。

—それはとりもなおさず、中井社長自身の覚悟でもあるわけですね。この子たちの人生を預かったという。

※「胸の泉に」 塔和子

かかわらなければ

この愛しさを知るすべはなかった

この親しさは湧かなかった

このおらかな依存の安らいは得られなかった

この甘い思いや

さびしい思いも知らなかった

人はかかわることからさまざまな思いを知る

子は親とかかわり

親は子とかかわることによって

恋も友情も

かかわることから始まって

かかわったが故に起こる

幸や不幸を

積み重ねて大きくなり

繰り返すことで磨かれ

そして人は

人の間で思いを削り思いをふくらませ

生をつづる

ああ

何億の人がいようと

かかわらなければ路傍の人

私の胸の泉にも

枯れ葉一枚も

落としてはくれない

中井 私は7人兄弟の5番

目。兄は家に仕送りをして

私たちはそれで学校に行っ

たのですが、親父は私には

「仕送りはええから、自立

せえよ」と言いました。そ

の後、独立を希望した時

に、兄が一人前の商人人

になるために金銭出納帳を

つけるよう言いました。絵

日記だつてつけたこともな

かったけれど、克明に記帳

しました。28歳で初めて千

日前に千房を開店する時、

5年間記帳した金銭出納

帳が担保となつて、預金

80万円の私に、信用組合が

3000万円融資してくれ

ました。

どんな些細なことも続け

たら本物になるし、本物は

続きます。松下幸之助さん

が「成功する方法は、成功

するまで続けること」と言ってい

ます。この単純なことがどれほど支え

になってきたか。

16歳の時、鉄鋼王カーネギーの

「大金持ちになる資格はただ一つ。

貧乏人の家に生まれること」という

言葉に出会いました。私はおかげさ

んで貧乏人の家に生まれましたか

ら、辛抱すること、耐えること、物

を大切にすることを知っています。

何よりも人のありがたさ、感謝する

ことも体で知っています。自分には

能力も学歴も親の七光りもなかった

ので、こうした言葉の一つひとつが

自分を支えてくれました。

おふくろは「田舎もんだからええ

かつこせんでええ」と言いました。

番頭さんにかわいがつてもらい大将

に好かれるために「素直になりなさ

い」と。素朴さと素直は大事だと松

下幸之助さんも言っています。

人は変わる

未来は変えられる

—そうした積み重ねで確立された経

営理念や哲学が、非行少年や元受刑

者たちのサポートにつながっていく

のですね？

中井 22歳の時、義兄の勧めで、女

房と二人、まったく他人のお好み焼

き屋を受け継ぎました。でも最初は

嫌でした。お好みを食べるのは好き

やけど、昭和40年代のお好み焼き屋

は、煙がもんもんとして換気扇が音

たてて回っていて恰好悪い。だから

職業としてはかわりたくない。結

局やることになるんですが、その時

思ったのは、経営者である私が恰好

悪いと思ったら、働く従業員はもつ

と恥ずかしい。胸を張って働けるよ

うなカツコイイ会社になるうと。お

好み焼き屋でも、社訓も経営理念も

社章もつくるうと。

千房のロゴマークは中に人が入っ

ています。人が命、企業は人なりで

す。「出逢いは己の羅針盤 小さな

心のふれあい己を賭けよ そこか

ら己の路が照らされる」—千房の社

訓です。マザー・テレサさんも言っ

たように「愛の反対は無関心」で

す。つまり、興味を持ってかわる

ということが大事なんです。

2年前に亡くなったハンセン病の詩

人・塔和子さんの「胸の泉に」(※)

という詩があります。これらが私の

ベースになってます。

おふくろは「お前がこうなるなん

て、夢にも思わなかった」と言いま



社員からのレポートや手紙は
すべてに目を通し返信する

した。親でさえ私のことはわからなかったのだと思ったときに、人間は無限の可能性を持っている、人間はみな変われると確信しました。

全国展開を始めたときは、猫の手も借りたぐらいで、採用では学歴も成績も保証人も一切問いませんでした。これは今も変わりません。思えば、そのなかにたくさんの方

少年・少女が入社

してくれていたんですね。あるとき寮に行つて店長のアルバムをめくつたら、暴走族時代の写真がありました。すごいな、人間て変わるんやと学びました。過去を変えることはできませんが、未来は変えられます。そうして、ゼロからプラスになっていく従業員が増えていき、千房では非行少年が立ち直つてると知られ

ていきました。児童養護施設や知人に採用を頼まれたりして、人が育っていきました。おかげさんで、今は千房の名は関西では有名で、大卒の新人も入ってくれるようになって、今年も44名新入社員がいます。

―社長自ら刑務所に面接に行かれたこともあると伺いました。

中井 あるとき、法務省から就労支援の依頼が来たんです。「千房は元受刑者の受け入れ経験があるから」と。採用で過去は問わなかったからです。今、出所者の半数近くが5年以内に再び刑務所に戻ってきて、その大半が無職。受刑者は一人当たり年間250〜300万円の税金がかかるから、就労支援してほしいというのです。でも当時は不景気で新卒採用さえしておらず、辞退したら、それならまずは刑務所を視察してほしいと。それで、10社の社長を連れて山口県の「美祢社会復帰促進センター」に行きました。その後も法務省から催促が来るので、面接に行つてみようとなったのです。

ただ、実際に出所者とかかわつてくれるのは現場ですから、まず役員会議で話をしました。賛否両論で、客商売だから何かあったら会社が潰れるとの意見もありました。でも、経営も人の教育もマラソンでなく駅伝です。自分がしてもらったことを、がんばろうとしている次の人に繋ぐことが大事やと話し、最終的に社長がすべて責任を取るからと説得しました。現場を考え、やみくもに採用するのではなく、殺人や薬物、性犯罪等再犯率が高い犯罪者は採用していません。

そして、前代未聞の刑務所内での採用募集が始まり、刑務所で人事部長と、一人90分ずつ面接しました。全員に泣かされました。なんでそんなことしたん？と聞き続けましたが、こんな人間に誰がしたんと思うたら、100%罪を咎められなかった。2人に内定を出し、身元引受人になって、半年後の雪のしんしんと降る日に迎えに行きました。それが最初で、今21名になっています。社員登用する人材も出てきました。



国を動かした政策提案

―日本財団と「職親プロジェクト」も展開されていますが、どのようなきっかけだったのですか？

中井 千房のことを知った日本財団から、最初の半年分の給料を出すので、もっと積極的に採用をと提案がありました。でも、給料の出どころが他所だと知ったから、出所者への説得力に欠けます。ただ、うちも大量には採用できないし、1人採用すると生活の支度に50万円はかかるので、支援してもらおうことになりました。

た。それで、職業の親として身元引受人になる「職親プロジェクト」を、私の周りの7社でスタートしたんです。現在、大阪13社、東京9社、計22社。北海道、九州、静岡、名古屋、和歌山にも支部ができる予定で、全国に広がるうとしています。そうなってくると日本財団だけ

では限度があります。さて国はどうなってるの？と。

出所者の半分が再犯で戻り、その費用が年間85億円です。国は、従来は「協力雇用主」に12万円ほど助成金を出していましたが、日本財団レベルまで国も出してほしいと国会に行きました。就労支援の強化特別委員会が立ち上がり、計3回国会に足を運んで、閣議決定もして、2015年の4月1日から、年間72万円の支給が始まりました。東京オリンピックに向けて安心安全、とにかく再犯をなくそうという機運もあります。国、法務省を動かしたのは前代未聞です。

―千房さんががんばっていることが、呼び水になっているんですね。実績の広がり、皆の「応援してみよう」という勇氣に繋がります。実際に現場でかわる社員の教育は、どのようにされているのですか？

中井 いいことばかりではなく、問題も起こりました。現場は100%信頼してかわつてきたから、それを裏切られる行為は痛みを伴いまし

た。すぐに店長やその上のスーパーバイザーと私で個別ミーティングを実施して、思ったことをレポートにも書いてもらいました。皆の支えが欠かせないので、強引にやれというのではなく、謙虚に皆の意見を聞いて、続けていくためにどうすればいいか、なぜ私は続けようと思うかを必死に訴えました。いま、ただのひとりも問題視する者はいませんし、会社に誇りを感じてくれるようになりました。情も大きくなっています。失敗したからとすぐにやめたら、単なる失敗で終わってしまいます。

隠さないことが復元力の源

―千房の取り組みは、いろいろなことがとてもオープンだと感じます。

中井 オープンにすることには、大きな意味があるんです。「復元力」です。過去の罪は伏せたいものですが、伏せるほどにブレーキがかかって、自信が持てなくなる。千房の場合は、オープンにすることによっ

なかい・まさつぐ

1945年奈良県生まれ。中学卒業と同時に乾物屋に丁稚奉公へ。73年大阪ミナミ千日前にお好み焼専門店「千房」を開店。年商50億円超、全国に60店舗以上を展開する大型チェーンへと拡大し、大阪の味を独自の感性で国内のみならず海外にも広める。86年に40歳にして高等学校を卒業。自身の経験をもとに社会教育家としても活躍し、企業の人材教育研修など、全国各地で講演を行う。著書に『できるやんか!』『それでええやんか』（潮出版）、『社長の教科書』（日本実業出版社）。 URL: <http://www.chibo.com/>

て、出所者はみんなに支えられています。ある受刑者が言ったのは「千房に採用された人がうらやましい。千房がオープンだから。自分はいまだに過去を隠して、いつもおどおどしている」ということでした。

一方で、矯正教育を受けて法的に罪は償っても、被害者がいるということ、加害者の家族や親戚も辛い思いをしていることは、決して忘れてはいけません。罪を犯した本人が社会に貢献することが、この人たちに對する償いだという思いで、元受刑者に寄り添い、守っていきます。

「だから入社式の「いい会社に入れましたよね」という言葉になるんですね。

中井 言うてしまふんですから、いつそうががんばらないと（笑）。

「同じ思いの企業が増えることを願います。輪が広がるためのエールをいただけますか？

中井 育てるといっても、彼らから学ぶことがたくさんあります。彼

らによってわれわれの心が磨かれます。大変なこともあるかもしれません。ただ、ピンチは物語のクライマックス。ピンチの時にぼやいては、千房物語はおもしろくもならないと考えるようにしています。みんなが必死に丸となって、苦楽をともにしてピンチをくぐり抜けたときに、感動のドラマがあります。ドラマチックな難題が来たら、今度はどんなドラマなの？と、そんな感じで（笑）

「今日は何度も熱いものが込み上げてきました。これから千房さんのお好み焼が一層おいしく感じられそうです。ありがとうございます！

インタビュー

公益社団法人日本フィランソロピー協会
理事長 高橋陽子

【2015年5月22日 千房株式会社本社にて】

▼職親プロジェクトで
千房で働く従業員に聞く

「第2章開幕」

壁をつくらないオープンな環境で働けて、気持ちが楽です。毎月レポートを提出しますが、初回は「第2章開幕」と題しました。弱い自分のことも正直に書いたところ、社長が電話をくださいました。地に足をつけ、仕事にぐっと気持ちが入っていききました。チャンスをいただいたから変わりました。

職親プロジェクトは6カ月間。期限が来ると、今後を決断する時です。私は職親プロジェクトで第2の人生を歩んでいます。将来は社員になって「採用する側」として社会復帰促進センターにもう一度行きたいんです。出所者の気持ちがかかる人間が側にいるだけで面接者が楽だと思いますし、応募者も話しやすいと思います。そして、かつてお世話になったセンターの先生に、仕事をさせてもらって変わった自分を見てほしいです。

決断が苦手な自分が、何をやりたのかちゃんと決めたのは人生で初めてです。自分で決断して、千房でこうして今働けているのは、すごく幸せです。

職親プロジェクトの実績をつくるのは自分。後に続く人のことを考えると、私が道を切りひらいて、がんばらなくてはと思います。